



## 令和4年度 校長だより1号

令和4年6月

着任3年目となりました、久しぶりの校長通信です。令和4年度、生徒への発信は「大谷選手の高校時代の目標設定」から始まりました。9マスの「マンダラ」というフレームワークを使った設定シートです。目標を1つ立て、実現に向け細分化したテーマを8つ決める、そして1テーマについて8つの具体的な手立てを考えるものです。目標は「～しよう」では実現しません。「～する」を具体的に自覚することで行動改革につながります。その理論をわかりやすく体現させるフレームワークです。実際の大谷選手のものを見せましたが、やはりただものではないという感想を持ちました。中でも「メンタル」というテーマに対し「一喜一憂しない」と言い切っているところが器の大きさを表していると感じました。「一喜一憂」という感情ではなく、分析や考察で出来事を受け止めていこうという冷静さから16歳の時点で精神的にはかなり落ち着いていたのだろうと推察されます。真摯で丁寧な内省は必ず自分に返ってくる、そのことを感じてもらえると思います。5年生の教室の前にはそれぞれのフレームワークが掲示されています。来校の際は、ご覧ください。

続いての発信は、キャリア講演会です。今回は企業や官公庁で人材育成の講演をされている経営コンサルタントの柴田励司氏に講演をお願いしました。「自分軸を持つ～はたらくを楽しめる人・楽しめない人～」というテーマでした。キャリアとは「どうやって生きていくか」であり、人生がうまく変わる秘訣を体験談を交え、楽しく話していただきました。生徒との掛け合いもうまく、内容もさることながら話し方も勉強になったと思います。勉強は脳を鍛えること、勉強する理由は、得た結果を活用するため。自分軸を持つには「ポジティブな意味づけ」が大切なこと、経験に勝る学びなし、経験：人：知識＝7：2：1という刺激的な講演会でした。そして必然の経験は文献値と人の話を聞くことだと今、目の前にある生活の大切さを再確認させてもらえる貴重なお話しでした。

年内にいくつかの講演依頼や外部委託の企画を考えますが、これだけ充実した教育活動を6年継続して受けられるのは中等教育学校の強みです。1年から6年まで自分の受け止めの変化を感じられる、積み上げた話を年々掛け合わせ自分のものに変えていくことができる。教育は環境を整え、「気づき」を与えることが最大の目的です。その「気づき」を成果に変えるのは生徒自身であり、変わる過程に「学び」や「成長」を見ることが学校現場の良さです。そのことを中等教育学校では強く感じます。社会に出たなら、成果を求められ、その過程に自分自身が達成感を感じ、モチベーションを高めていかなければなりません。モチベーションは与えられるものではなく、生み出すものです。自分でモチベーションを生み出せる力こそ「生きる力」であり、「ポジティブな意味づけ」ができるかどうかであると思いました。そんな気づきを何度も与えられる学校でありたいと思います。

柴田さんの話の中に「思い立ったらやってみる」がありましたが、これも校長として肝に銘じたい言葉です。「変化なくして成長なし」、これからも教育者として、そして子や孫を入学させたいと思う親心も忘れない学校づくりを心がけていきたいと思います。